

新刊紹介

熱帯アジアの人々と森林管理制度—現場からのガバナンス論—

市川昌広・生方史数・内藤大輔 編著. 2010. 280pp. 人文書院(定価 3800 円+税, ISBN978-4-409-24085-4)

藤間 剛(森林総合研究所国際連携推進拠点)

Ichikawa, M., Ubukata, F. and Naito, D. eds., People and forest management systems in Tropical Asia: local-level impacts of diverse governance systems. Jinbun Shoin

TOMA Takeshi (Bureau of International Partnership, Forestry and Forest Products Research Institute)

途上国の森林減少および森林劣化からの排出削減と森林保全(REDD+)に関する議論の進展と、名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議(CBD-COP10)は、それぞれに国際的な森林保全に関わる2010年の代表的な話題である。端的に言うとREDD+は森林の減少と劣化を防ぎ森林保全を進める活動に経済的インセンティブを与えるものであり、生物多様性条約は世界の生物多様性を保全していくためのものである。またそれぞれに熱帯林を生活の場として生活している人達の権利への配慮が明記されている。そのため熱帯林の保全や持続的利用、そして人々の生活の向上につながる「はず」のものである。ここで「はず」と書いたのは、そのような国際的な枠組が簡単に目的を達成できるとは期待できないからである。熱帯アジア諸国の森林管理制度と人々の暮らしについて述べている本書を読み、そのことをあらためて感じた。ともすれば私自身も、東南アジア、南アジアなどと地域をまとめて表現しがちである。しかし、それぞれの地域内の国にはそれぞれの歴史や制度がある。そして、一つの国の中でも地方によってさまざまな森林をとりまく状況がある。もちろん森林やその周囲で暮らす人々もいろいろである。持続的森林管理、生物多様性保全、住民参加など、同じ名の目標をかけたとしても、実際の活動とその影響が異なっているのは、むしろ当然であろう。

本書では、熱帯アジアの国々で森林と関わり合いながら暮らす住民に影響を与えてきた、あるいは今後、影響を与えるだろうそれらの制度を、1)従来型、2)住民参加型、3)市場志向・グローバル型に分類している。1)従来型もしくは2)住民参加型の森林管理制度を対象としている章では、それぞれが対象とする国(マレーシア、バングラデシュ、ラオス、フィリピン、タイ、インドネシア)の森林管理制度について歴史的背景とそこで暮らしている人々が制度から受けてきた影響が述べられている。3)市場志向・グローバル型を対象とする章では、森林認証(マレーシア、インドネシア)、CDM植林(インドネシア)、REDD(カンボジア)、生物多様性条約(ボルネオ島)という自主的もしくは国際的枠組の概説とカッコ内に示した国における森林地域住民への影響が、述べられている。

本書の特徴として、各章ごとに制度や枠組に関する説明が簡潔になされるとともに、それぞれの章の著者たちによる現地調査にもとづいて、現地で暮らす人々の立場から制度や枠組の影響を述べている点がある。森林管理に関する法律や制度の堅苦しい解説

ではなく、そこに暮らす人々の生活と人々に対する著者たちの思いが伝わってくる。それぞれの章の独立性が高いため、自分が知りたい国や制度がある場合は、その章だけを読めばよい。全体として不思議なまとまりが感じられる本なので、それぞれが興味をもっている国や制度の章から読み始め、他の章へ読み進むのが良いと思う。

余談ながら熱帯の森林地域で暮らしてきたからといって、その人達が熱帯林を持続的に利用してきたとは限らない。本書はそのことにも注意を促している。その点について、気に入った部分を次に引用し、紹介文の結びとする。

植林から15年以上待つて得た木材生産からの収入は、住民を落胆させるほど低かった。伐採跡地をふたたび植林地にする住民は少なく、多くの住民が短期間に比較的高い収入が期待されるバナナ園に転換中である。

地域社会にかかわる人々の認識に訴えていく際に重要なのは、現実に即した理論や理解の枠組を提供する努力である。問題となる地域社会に直接かかわらない人々の関心をひくためだけなら、キャッチコピーだけでも十分かもしれない。しかし問題に対処していく際に理想化された地域社会を想定していると、現実を不適切な基準で評価したり、大きすぎる現実との落差に挫折したりしかねない。

狩猟採集民としての出自をもつ人々が全員、狩猟採集によって暮らしていきたいと思っているわけではない。都市で生活することを望み、実際にそうしている人たちもいる。森林に頼らない生活に変化することが問題ではない。彼ら自身の意志に関係なく、外部の圧力によって地域社会のそれまでの日常生活が不便になり、他の方法による生活を余儀なくされることが問題なのだ。重要なのは、これまでどおり森林のそばで暮らしたいという人々の選択を尊重することだ。

ご一読をお勧めします。



熱帯アジアの人々と
森林管理制度—現場からのガバナンス論—

市川昌広・生方史数・内藤大輔 編著

People and Forest Management in Tropical Asia: Local Level Impacts of Diverse Governance Systems

SAKUR

Global COE Program
HUMANOSPHERE